

ネットスタディ——インターネットによる文学リサーチ

石 木 利 明

はじめに

たった数年前まではちまちまと個人的情報を処理するのみだったスタンド・アローンのパソコンが、世界中のコンピュータに瞬時に接続し、潜在的には全世界の知の蓄積をいとも簡単に共有できる時代がやって来た。しかし、この知の蓄積は有用性や品位のあらゆるレベルを網羅し、その総量は見当もつかないほど膨大なものなので、その中から必要な情報を無駄な時間を費やすことなく引きだしてくるには多少の知識と技術が必要となる。英米文学のリサーチを行なううえで、ネット上にはどんな有益な情報があるのか、どうすればそのような情報にアクセスできるのかを具体的に紹介することが本稿の目的である。

1 リソース探索の入り口

1. Search Engineの利用

全世界の数千万台のコンピュータの連結が織りなす情報空間サイバースペースは、しばしば「大海」の比喻をもって語られる。その無辺の広がりや資源の無尽蔵を反映するメタファーだ。その茫漠と混沌の中に投げ出されたわれわれは、潮の流れに身を任せるしかない漂流者となってしまう恐れがないのだろうか。そうならないためのさまざまな工夫がインターネットには備わっている。大海の中の何処とも知れぬ岸边にたゆたうたった一つの求める波を特定し、瞬時にそこに移動できるナビゲーション・システムの一つがサーチエンジンと呼ばれるものだ。代表的なものに Lycos (<http://www.lycos.com/>), Excite Netsearch (<http://www.excite.com/>), Open Text Index (<http://www.opentext.com:8080/>), AltaVista (<http://altavista.digital.com/>), HotBot (<http://www.hotbot.com/>) などがあり、いずれも頼もしいナビゲーターとなってくれる。

ただし、このサーチエンジンの使い方には多少の技術が必要となる。というのは、検索語欄にたった一つの語のみを入力して検索すれば、場合によってはそのキーワードを含む数万から数十万のページがヒットする。これらのページをしらみつぶしに訪れていくという気の遠くなるような作業をする人は誰もいないだろう。これで終わってしまったのは、検索というのも名ばかりのもので、全く意味を成さない。サーチエンジンを使いこなして、求める情報へ確実にアクセスするうえで重要なのは、検索にさまざまな条件をつけてできるだけヒット数を絞り込むことである。各サーチエンジンとも、条件検索の基本は AND, OR, NOT をはじめとする Boolean operators を使った検索式であるが、¹この Boolean phrase 入力の煩わしさを軽減しようと、それぞれ独自に条件検索のイン

ターフェイスを工夫している。例として、筆者がよく使う HotBot で、1692年マサチューセッツ・セイラムで行われた魔女裁判に関する情報を含むホームページ（以下 HP と記す）を検索してみる。（Fig. 1）

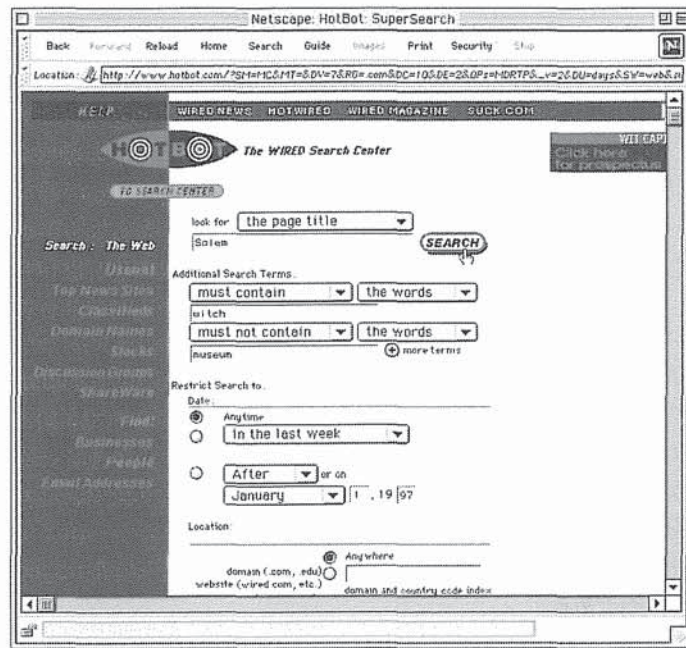


Fig.1

HotBot は、条件検索用に “supersearch” というページを用意しており、ここからさまざまな検索オプションを組み合わせてヒット数を絞っていくことができる。まず、HP のどの部分のテキストにキーワードが含まれているのかを選ぶオプションから “the page title”（ページのタイトルにそのキーワードを含む）を選び、“Salem” と “witch” 両方を同時に含む検索を行なってみると、ヒット数は350のページになる。HotBot は、一つのサイトが複数のページをもっている場合、ルートにあるメインの HP だけではなくその下のディレクトリにある全ページを抽出するので、サイト数ではこの数分の一になるが、これでもまだ多いようであれば、さらに “museum” という語を含む指定で AND 検索を行なってみると、96にまでヒット数が絞り込まれる。ここまで絞り込めれば上々である。（ちなみに HP のすべてのテキストからキーワードを探しだす “all the words” のオプションで “saalem” だけを検索語とするとヒット数は182182，“saalem AND witch” でも5195という膨大な数になる。）あとはリストアップされたページタイトルとアブストラクトを参考に、それぞれのページをブラウズしてみればよいだけだ。ここではとりあえず、リストの中のトップに表示されたセイラムの有名な魔女博物館 “Salem Witch Museum” (<http://www.salemwitchmuseum.com/welcome.html>) のページに行ってみる。このサイトでは、魔女裁判のクロノロジカルな詳細は当然として、なかなかお目にかかれない審判や処刑の様子を描いた絵画の画像なども見られる。また、“Museum Store” のページでは、関連書籍、ビデオ、CD-ROMの注文もでき、さらに深い情報入手へとつながっている。同時に、他の魔女関連の博物館や “The House of the Seven Gables” をはじめとする史跡の HP へのリンクをたどることでヴァーチャルなセイラム・ツアーも

でき、より広いコンテキストの中で1692年の事件を把握する材料を得ることができる。

サーチエンジンでの検索に始まるこの一連のネットサーフィン、検索さえうまくこなせば30分とかからない。これと質・量ともに同等の情報を得るのに、従来ならばどのような手順を踏んでいただろうか。図書館をはしごし、大型書店の書棚を渉猟し、あるいは専門家に直接教えを請い、場合によっては現地セイラムへと足を運ばなければならないかもしれない。この差は歴然だ。インターネットは、このように、情報入手の量と速さにおいて圧倒的な効率化をもたらしたのである。

2. Net Directory と Meta Page

上記のように、サーチエンジンは、言ってみればインターネットの大海全体に投網をかけるような情報の探し方であるわけだが、求める情報に近づくためのもう一つのウェブへの入り口として、リソースをカテゴリー別に分類整理した Net Directory がある。大分類から細分化された小分類へと、求める情報が属しているカテゴリーに到達するまでディレクトリをたどって降りていくやり方だ。求めるものが Net Directory の分類したカテゴリーに明確に属していると期待できるときには、サーチエンジンを使うよりも手っ取り早い探索方法となる。ある作家に関する HP を探したいというような場合などがこれにあたる。例えば Thomas Pynchon のリソースを探す場合、Net Directory の老舗 Yahoo ([http:// www.yahoo.com/](http://www.yahoo.com/)) の14に分けられた大分類の項目の中から “Arts and Humanities” を選び、表示される24のサブディレクトリの中から “Humanities” を、さらに細分化された17のサブディレクトリから “Literature” を、さらにその下の33のサブディレクトリから “Authors” を・・・というように降りていき、最終的に “Literary Fiction” のディレクトリの中の “Pynchon” をクリックすると計21のリソースへのリンクが表示される、という具合である。(Fig. 2)

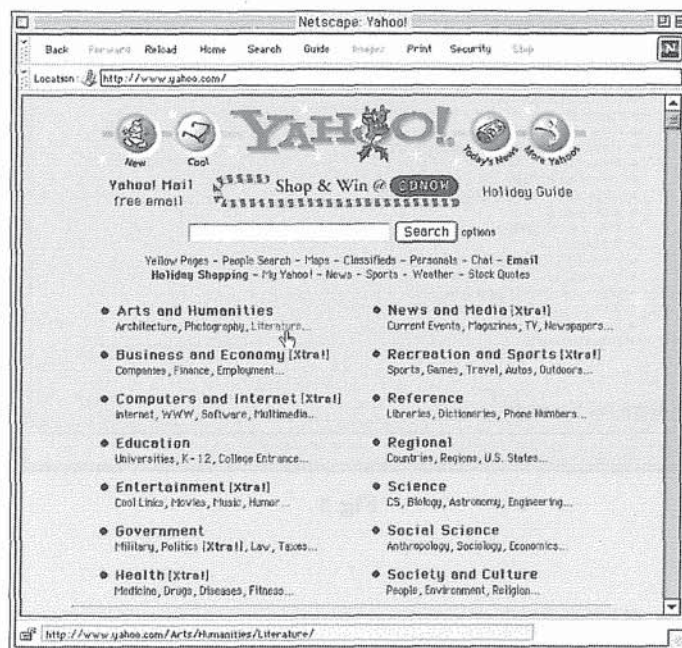


Fig.2

このように、Net Directoryは、膨大な数のサイトを網羅的に分類したリンク集であるわけだが、分類のカテゴリーをある特定のものに限定し、関連リソースへのリンク・コレクションを作っているサイトがある。そのようなサイトを、ページ情報のページという意味で、Meta Page（あるいはSuper Site）と呼ぶ。カテゴリーを限定したMeta Pageの方が、専門家の手になるものであるだけに、網羅的なNet Directoryよりも多くの情報を持ち、分類の仕方も整備されている場合が多い。英米文学関連でも、非常によく作られたMeta Pageがいくつもあり、そこを拠点としてリソース探索を始めるのが効率的だ。ペンシルバニア大学の Literary Resources on the Net (<http://www.english.upenn.edu/~jlynch/Lit/>) は、その代表格と言ってよい。(Fig. 3) 時代別英文学、アメリカ文学、批評理論、電子テキスト、コース・シラバス、ビブリオグラフィを始めとするリファレンス類など、とてもここでは具体的に紹介できないほど膨大な関連資源へのリンクが分類整理されている。他にも、-カーネギーメロン大学の English Server (<http://english.www.hss.cmu.edu/>)、カリフォルニア大学サンタバーバラ校の VOICE OF THE SHUTTLE (<http://humanitas.ucsb.edu/shuttle/english.html>)、ルイジアナ大学の Literature Webliography (<http://www.lib.lsu.edu/hum/lit.html>)、Author, Author! (<http://www.li.net/~scharf/author.html>)、名古屋大学松岡光治氏による English Literature on the Web (<http://lang.nagoya-u.ac.jp/~matsuoka/EngLit.html>)なども、それぞれ特色を打ち出しながら非常に充実したリンクを提供している。

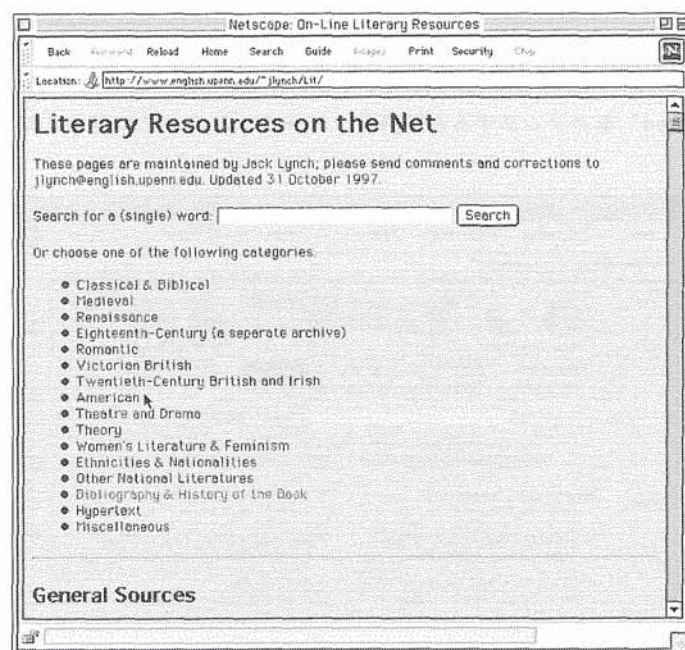


Fig.3

Ⅱ 電子テキスト /Hypertext

インターネット上では、古今の重要なテキストを電子化する作業が精力的に行われている。テキストを紙というモータルな物質的メディアと不可分なさまざまな不都合から解放し、テキストによ

り広い共有性と確実な恒久性を与えようとする作業である。

英米文学においても多くの作品が電子化されており、著作権が消滅している文学史上重要な作品は、そのほとんどが電子テキストとなっていると言ってもよいだろう。これらの電子テキストの入手先としては、ボランティア・グループによる計画的電子化作業を長年行なっている Project Gutenberg (<http://jg.cso.uiuc.edu/PG/welcome.html> あるいは <http://www.w3.org/hypertext/DataSources/bySubject/Literature/Gutenberg/Overview.html>) がかねてより名高いが、Project Gutenberg によるものも含め、インターネット上に散在する膨大な数の電子テキストをほぼ網羅的にデータベース化した ALEX (<http://www/lib.ncsu.edu:80/stacks/alex-index.html>) から見つけるのがベターだ。電子テキストのリンク・コレクションは、他にも、バージニア大学の Electronic Text Center (<http://www.lib.virginia.edu/etext/ETC.html>)、ミシガン大学の電子テキスト・アーカイブ (gopher://etext.archive.umich.)、カーネギーメロン大学の The On-line Books Page (<http://www.cs.cmu.edu/books.html>) などがあり、ALEX で抜け落ちているテキストも見つかる場合がある。これらの電子テキストは、Webブラウザでの閲覧からマウス・クリック一つで直接ダウンロードできる（長編小説の場合はダウンロードに数十分の時間を要することを覚悟しなければならないが）。

肝心の利用法だが、せっかくの電子化である。単にコンピュータの画面上で「紙」のテキストの代替物として読むというのではなく、「電子」であることのアドバンテージを活かす使い方が基本だろう。まず考えられるのは、エディタ（あるいはワードプロセッサ）で開き、その検索機能を使い簡易的なコンコーダンスとして利用することだ。これには、例えばgrep検索や複数ファイルのくし刺し検索などが可能な、できるだけ検索機能の充実したエディタを使用するのが望ましい。テキスト検索に特化したアプリケーション（Macintosh版ではシェアウェアの“UltraFind”など）を使うのも有効だ。大冊のコンコーダンス（そもそもその作品にコンコーダンスが存在することが前提だが）を図書館などで調べるといった、かなり気の重くなる作業と違い、質量がないに等しい電子らしく、実に気軽にそして素早く検索することができ、これならば日常的に使用する気にさせてくれるというメリットは大きい。ある語がテキストのどの部分で使われているかが繰り返し簡単に一覧できれば、新しい読みへとつながる機会も増えるだろう。

上記の「電子テキスト」とは、われわれがふだん「テキスト・ファイル」と呼んでいる ASCII コードで書かれたテキストであるが、電子テキストには、この他、hypertext フォーマットのものがある。プレーンな ASCII text による電子テキストと hypertext によるそれとは、利用法において全く異なったものとなる。hypertext は、ウェブの HP と同じく HTML (Hypertext Markup Language) で書かれた、つまりリンク情報が埋め込まれたテキストである。したがって、hypertext フォーマットの電子テキストは、可能性としてテキストのあらゆる部分をインターネット上のあらゆるリソースと関連づけることができるということになる。このような hypertext の特徴を活かした電子テキストの例を2つほど挙げておこう。

Jane Austen の hypertext 版 *Pride and Prejudice* (<http://www.pemberley.com/janeinfo/pridprej.html>) では、テキスト内の語句が、登場人物の（そして Austen 自身の）伝記的註解、家系図、地図、地理的歴史的背景の解説、主要場面のイラストレーションなどのさまざまな別ファイルにリンクしている。読者は、色のついたこれらの語句をマウスクリックし読解に必要となるさまざまな材料を参照しながら読むことで、多角的かつ広いコンテキストの中で非常に充実した精読を行なえるようになっている。もちろん ASCII text の場合と同じくテキスト内検索もできることは言うまでもない。(Fig. 4)

T. S. Eliot の “The Love Song of J. Alfred Prufrock” の hypertext ([http:// www.cs.amherst.edu/~ccm/prufrock.html](http://www.cs.amherst.edu/~ccm/prufrock.html)) の場合は、テキストの語句がウェブ上の他のサイトにあるさまざまなリソースへとリンクしている。例えば、エビグラフ 6 行目の “rispondo” はコロンビア大学の Digital Dante Project (<http://daemon.ilt.columbia.edu/projects/dante/index.html>) に、14 行目の “Talking of Michelangelo” は WebMuseum の Michelangelo のページ (<http://sunsite.unc.edu/wm/paint/auth/michelangelo/>) に、94 行目の “I am Lazarus, come from the dead” はヴァージニア大学の Electronic Text Center にある King James Version の聖書全文検索のページ (<http://etext.virginia.edu/kjv.browse.html>) にそれぞれリンクしている。われわれは、Eliot の一編の詩を読みながら、同時に Dante について、Michelangelo について、そして聖書についての広範な知識を学ぶことができるという仕掛けで、文学テキストのインターテクスチュアリティ（そしてまさに Eliot の言う「伝統」）をまざまざと知らされる好例となっている。

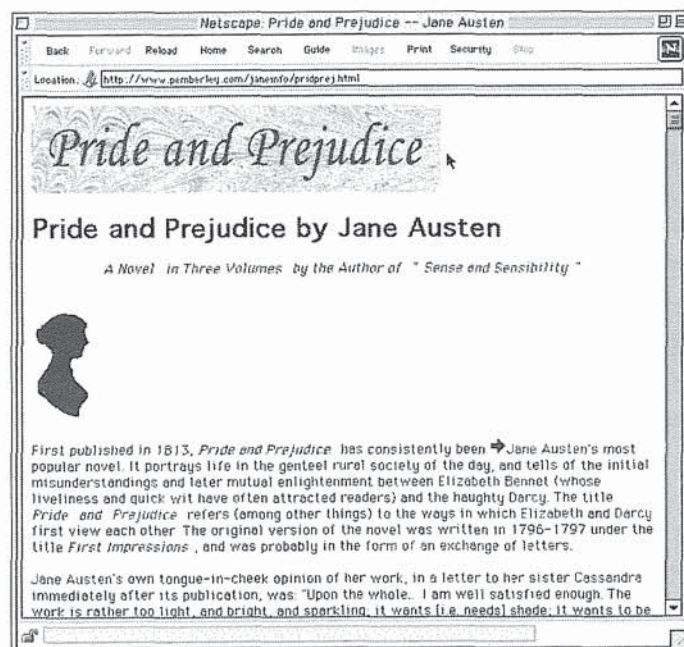


Fig.4

文学テキストそのものとインターネット上に分散したさまざまな知識やリファレンス（しかも文字情報だけではなく静止画、動画、音声を含むマルチメディアの）とを柔軟に結び付けられる hypertext は、従来大学の閉ざされた教室の中で行われてきたテキスト註解とその技術の伝授という密室の ^{エンタリクス} 秘 義 を、あらゆる人が容易に利用できる形にして開放し、しかもこれまで以上の深いテキスト理解を促す（あるいはそのための道具を与える）ことのできる画期的なテキスト・フォーマットとして大きな可能性を期待できるものだ。

Ⅲ ビブリオグラフィと文献の入手

1. OPAC による文献情報

研究活動は、まず文献調査に始まる。インターネットがこれほどまでに普及した今日であっても、われわれの研究の大部分を支えているのは書籍、学術雑誌という紙のメディアの文献であることは当分変わりそうにもない。しかし、インターネットは、この文献調査のためのツールとして従来から見ると信じられないような効率化と利便性をもたらしてくれた。ビブリオグラフィカルな情報を得るために、果たして十全な資料を持ち合わせているかどうかも判然としない図書館をいくつも訪問し、貸し出しその他の業務に追われている司書たちを煩わせるのはもはや過去のこととなった。自宅のパソコンの画面がこれからわれわれの頼もしいリファレンス・デスク——しかも全世界の図書館につながった——として活躍してくれる。

かなり以前から、各大学図書館や研究機関は所蔵文献の蔵書目録を電子化し、そのデータベースを一般に公開するという作業を行ってきた。これを OPAC (Online Public Access Catalog) と呼ぶ。利用者は個々の OPAC に telnet という接続方式でリモート・アクセスして蔵書の検索をすることができるようになり、これだけでも実際に図書館に赴いて蔵書カードを繰りタイトルと著者名からだけの単純な検索しか行なえなかったことを考えると画期的出来事だったわけだが、実際はせいぜい学内 LAN を利用できる環境にある限られた人間が、自分の所属大学の図書館の目録を調べるといった程度の利用がほとんどであったと思われる。この telnet がインターネットに組み込まれることによって、本当の意味での“Public Access”が可能になったと言ってよい。利用者層の拡大ばかりではない。全世界の大学・公共図書館の OPAC をいとも簡単に渡り歩くことができるというのがインターネットのすごさである。

OPAC を公開している図書館の HP へのリンクを集めた LibWeb ([http:// sunsite.berkeley.edu/Libweb/](http://sunsite.berkeley.edu/Libweb/)) は、世界中の図書館の入り口として大変便利なサイトだ。場所、ライブラリのタイプ、名称などのキーワードから目的の図書館が検索できるし、地域別のディレクトリから探すことも可能だ。アメリカの大学図書館のディレクトリを開くと、6 百数十もの長大なリストが表示され、さすが情報ハイウェイの国と改めて感心してしまう。日本の図書館に関しては、Jump to Library in Japan (<http://ss.cc.affrc.go.jp/ric/opac/opac.html>) が網羅的である。

各図書館とも、その HP から OPAC を利用できるようになっている。従来の接続方式 telnet は、クライアント・アプリケーションがハードディスクにインストールされていさえすればウェブ・ブラウザが自動的に橋渡しをしてくれるとはいえ、最近ではほとんどの OPAC が、ブラウザ上でシームレスに検索でき圧倒的に使い勝手のよい WWW サーバに急速に移行した。(わが大学の OPAC が、いまだ telnet を引きずっている数少ない図書館の 1 つであるのは大変残念なことだ。) 利用例として、ペンシルバニア大学図書館の OPAC “FRANKLYN” (<http://www.franklin.library.upenn.edu/>) を使ってセイラムの魔女裁判書誌を検索してみよう。(Fig. 5)

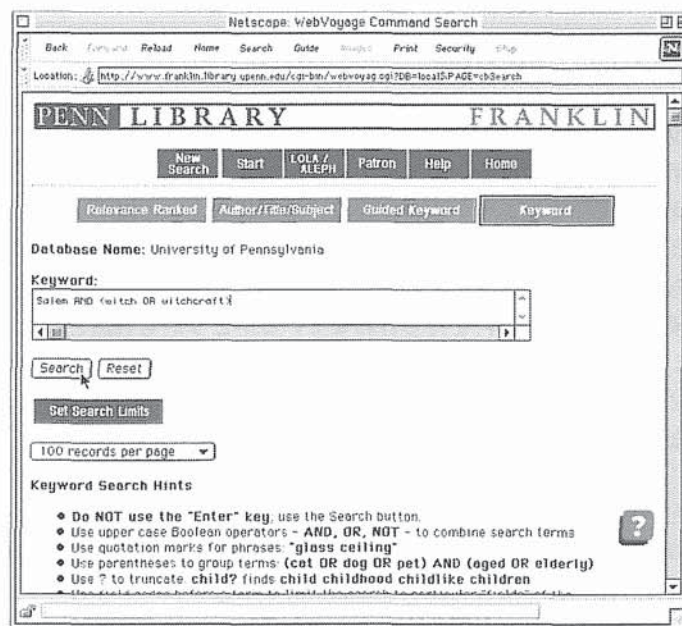


Fig.5

“FRANKLYN”のいくつかの検索オプションの中から“Keyword Search”のページを開く。検索語欄にキーワードを入力していくのだが、やはり、ここでもサーチエンジンの項で述べた Boolean operatorsによる条件検索が基本となる。同じページに“Keyword Search Hints”として検索書式の凡例が記されているのは親切だ。ここに“Salem AND (witch OR witchcraft)”と入力して検索すると、67件のエントリーが表示される。当時の牧師 Deodat Lawson がまさに事件の渦中 1692年に書いた生々しい記録や、神学者 Cotton Mather の有名な *Wonders of the Invisible World* (マイクロフィッシュ版) などの同時代の貴重な記録に始まり、1996年刊行の最新の研究書 3冊に至るリストは、セイラムの魔女裁判を知るための十分すぎるほどの文献情報を与えてくれるものだ。

そもそもこの件に関してペンシルバニア大学の図書館を選んだのは、郷土史として充実した資料収集が行われているはずだという予測に基づくもので、この結果は当然と言えば当然である。このように、調査したい事柄に強いと思われる図書館に当たりを付けてそのOPACを利用することが、文献情報入手の鍵となることはいうまでもない。

2. UnCover による雑誌論文の検索と入手

上記のように便利なOPACであるが、そのカバーするところは書籍・マイクロフィッシュなどが中心である。では雑誌論文に関してはどうすればよいのか。雑誌論文の文献情報は研究に欠くことができないものだが、個々のOPACがそれぞれ膨大な数の雑誌論文をデータベース化することは到底不可能な話だ。ここで力となってくれるのが、ウェブ上の雑誌論文データベース UnCover だ。UnCover は、1988年秋以降の約17000タイトルの雑誌、700万以上の論文・記事データを擁し、しかも無料でこれを検索できる。(Fig. 6)

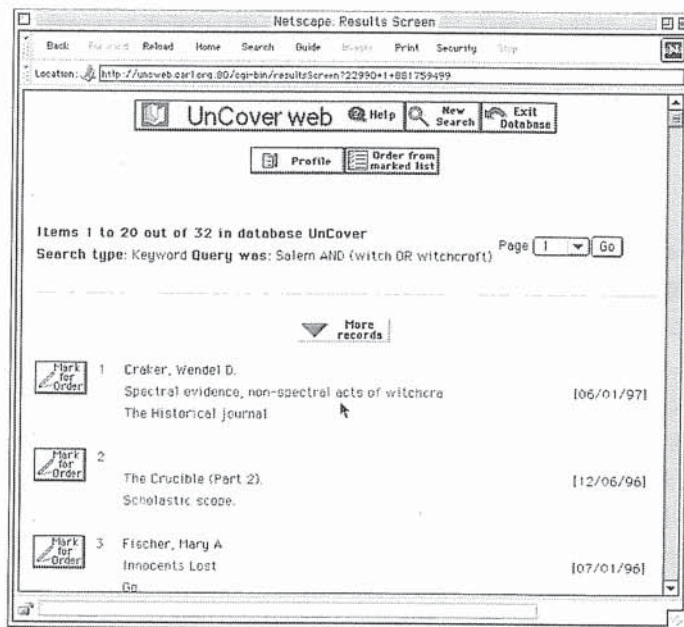


Fig.6

まず UnCover Web ホーム ページ (<http://uncweb.carl.org/>) から “Search the UnCover database” と書かれたボタンをクリックし、UnCover Login のページを開く。ここでユーザー Profile のナンバーとパスワードを入力する欄があるが、検索をするだけであれば、とりあえずこれは記入せずに “Search UnCover Now” のボタンをクリックすると UnCover Query Screen の画面になり、ここから検索が実行できる。検索のカテゴリーには、論文の筆者の名前で検索する Author or Name Search, 論文のタイトル, サブタイトル, アブストラクトなどに含まれる語で検索する Keyword Search, 雑誌のタイトル (あるいはその一部) を入力することによってそれに収録された論文一覧をブラウズできる Journal Title Browse Search がある。

Keyword Search を使って、ここでもセイラムの魔女裁判に関する論文を検索してみよう。データを絞り込む検索条件の書式はやはり Boolean operators だ。“Enter search terms” と書かれている検索語欄に, “Salem AND (witch OR witchcraft)” と入力し, “Enter” ボタンをクリックすると計37論文がリストアップされ, それぞれのタイトルをさらにクリックすると収録雑誌の発行年月や巻数等の詳細を見ることができる。先にも述べたように, UnCover は, 17000タイトルとはいえ, あらゆる学術雑誌を網羅しているわけではないし, しかも1988年以降のデータのみに限られるため, 完璧な文献情報を提供してくれるものではない。しかし, 少なくともここ10年の最新の研究論文について知るには, ひとまずこれで十分だろう。

UnCover は, 検索した雑誌論文のファクスによる配信サービスを行なっている (実はこれが UnCover の主要なサービスなのである)。これを利用するには, クレジットカード番号, 電話・ファクス番号などの情報を登録し, ユーザー Profile の作成を行なっておかなければならない。料金は, 1 アイテムあたり, サービス料 \$ 10 + 著作権料 \$ 3.00 ~ \$ 15.00 + ファクス料金 \$ 4, しめて \$ 17 ~ \$ 29 とかなり高額になるが, 急を要する場合や国内の大学図書館が購入していない雑誌の場合にはありがたいサービスとなるだろう。

UnCover には、また、登録した雑誌（50タイトルまで可能）の新着のコンテンツをメールで定期的に知らせてくれる“UnCover Reveal”というアラート・サービスがある（これも有料）。専門領域に関連した雑誌を登録しておけば、新しい論文情報を、忘れずに、しかもなんの労力もなくチェックできるし、送られてくるメールを保存・加工すれば、私家版ミニ論文データベースを作ることも可能だ。

3. NACSIS Webcat による文献所在の調査

UnCover による雑誌論文の高額なファクス配信を利用する以外に、文献入手のためにインターネットがどのように使えるのかを紹介しよう。

書籍の購入に関しては後述するが、まずは図書館を利用するケースを考えてみよう。自分の大学の図書館に文献がない場合、国内の他の図書館の貸し出しあるいは文献複写サービスに頼ることになるが、文部省学術情報センター（NACSIS）が1997年4月より公開した Webcat (<http://webcat.nacsis.ac.jp/>) を使えば、その書籍および雑誌をどこの図書館が所蔵しているか調べることができる。これは従来から同センターが行なってきた学術情報データベース NACSIS IR のいくつかのサービスのうちの1つを独立させたものだ。NACSIS IR が現在でも telnet 接続であり、かつ大学の教職員限定という利用者制限があり（利用申請が必要）、なおかつ利用に際して課金する（国の機関が、である）という、時代遅れな体制を続けている中で、Webcat にそのような制限や課金は設けられておらず、文部省としては時代に即応した計らいである。ただし、これには「試行サービス」との但し書きがあり、いつ制限・課金の体制に組み込まれることになるかは定かではない。いずれにしても、大変便利なサービスであることは確かだ。著者名、タイトル、ISBN、キーワード（AND 検索しできない仕様は是非改善してもらいたい）の検索により、求める文献の所蔵図書館が表示される。あとは従来通り所属大学の図書館を通じて貸し出し・複写依頼の手続きをとるだけだ。

4. オンライン・ブックショップによる書籍の購入

書籍を購入する場合も、インターネットは実に便利なツールとして使える。インターネット普及により事業参入めざましい分野に、世界規模の市場を簡単に獲得できるというかつてない利点を有するオンライン通信販売があり、その一つがサイバー・スペース仮想書店（以下オンライン・ブックショップと呼ぶ）というわけだ。

数あるオンライン・ブックショップの中で、間違いなく最大・最良の書店は、in print のもので100万タイトル以上、絶版書150万タイトル以上、総計250万タイトル以上のカタログを誇る amazon.com (<http://www.amazon.com>) だ。Books in Print の総タイトルが約180万であることを考えれば、“Earth’s Biggest Bookstore” なる自称も誇張とは言えまい。取り扱いタイトル数において他の有力オンライン・ブックショップに大きく水を空ける圧倒的な量だ。（奇妙な書店名はその水量で他大河を圧倒する Amazon 川に由来する。）タイトル、著者、主題、キーワード、発行年、ISBN の諸項目による検索サービスのインターフェイスが良くできていてしかも処理が速く、したがって、いわばミニ Books in Print のオンライン・データベースとしてもかなり満足のいく利用ができる（新刊書に関しては、OPAC から得られるビブリオグラフィーよりも情報量が多い場合もある）点は、取り扱いタイトル数の少ない他書店には望めない付加価値となっていて非常に便利だ。

(Fig. 7)

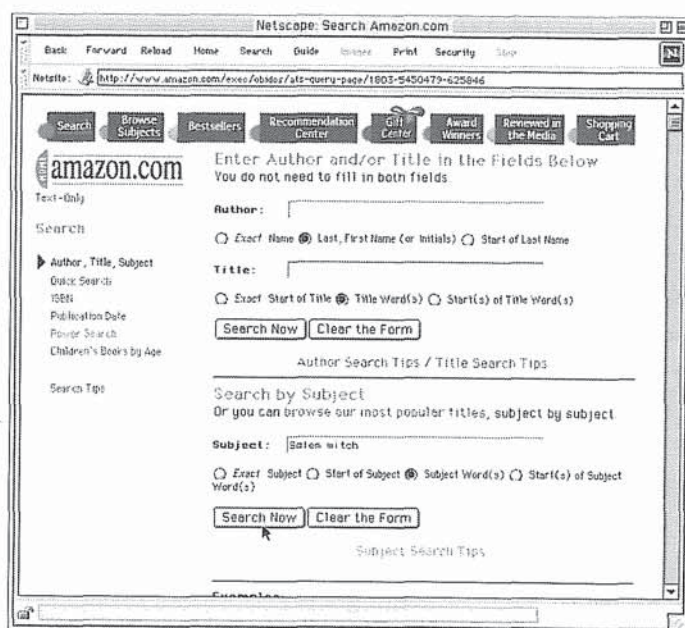


Fig.7

オーダーの方法も極めてシンプルかつ洗練されており、Webブラウザ上ですべて処理できる。検索で絞り込んだものの中で購入したいタイトルをクリックひとつで“Shopping Basket”に入っていく。選定作業終了後“Buy Items Now”のボタンをクリックし、後は指示に従って氏名、メールアドレス、クレジットカード（VisaかMasterあるいはそれらの提携カード）のナンバー、配送先の住所などを入力（2度目以降の購入の際は、パスワードを使ったログインによってこれらの作業も省略できる）していき、最終的に“PRESS THIS TO SUBMIT YOUR ORDER”ボタンを押せば発注完了。あっけないほど簡単だ。オーダー内容を確認するメールが数分後には届いている。オーダーした本が発送される度にそれを知らせるメールも送ってくれる。このあたりのサービスの細やかさも実に好感がもてる。

日本への shipping には、3つのオプションが用意されている。一番安い Standard Shipping (surface shipment) の場合、一回の発送基本料 \$ 4 + \$ 1.95 × 冊数。国内の宅急便並みといっていだろう。発注してから6～8週間で届く。急ぎの場合は、少々値が張るが、DHL World Mail Shipping（発送基本料 \$ 7 + \$ 5.95 × 冊数。2週間程度）、DHL Express Shipping（発送基本料 \$ 30 + \$ 5.95 × 冊数。1週間程度）を利用することもできる。

さらに、amazon.com には、著者名やサブジェクトを登録しておけば、その新刊本が出版されるたびにe-mailで知らせてくれるという、研究室出入りの洋書業者顔負けの“Personal Notification Service”もあるので、研究分野の作家名やキーワードを登録しておけば新刊情報をほぼ遺漏なく入手できることになる。

洋書の購入にオンライン・ブックショップを利用することの利点は、まず、そのサーチ・エンジンを利用して、ある項目に関するビブリオグラフィカルな情報を簡単に、しかも検索条件の組み合わせによってさまざまな角度から得られることである。国内の洋書店に直接赴いたりその Announcement 等を参照したりすることでは、一義的に分類された限られた数の在庫図書・新着図

書の情報しか得られないことと比較されたい。第二の利点は、価格である。国内洋書店では\$1＝¥200前後が相場だろうが、オンライン・ブックショップでは為替レートそのままが適用される。しかも amazon.com では定価の10～30% off のディスカウントがなされているものもあり、高額な本をまとめ買いすれば、送料を含めても国内洋書店の三分の二以下になることはざらだ。不利な点はただ二つ、当たり前だが実際に手にとって内容を瞥見できないこと、買っても数週間のお預けを食うことだけだろうか。

先にも触れたように、amazon.com は150万タイトル以上の絶版書も扱っており、オーダーしておけば入荷し次第発送してくれるのだが、こと絶版書に関しては、古書専門のサイト Interlock (<http://www.interloc.com/>) を利用するほうが迅速かつ確実に入手できる。Interlock は、登録・参加している数多くの古書店それぞれが所有するカタログを一本に統合したデータベースをつくり、購入者とその書店との橋渡しをしてくれるサイトだ。このデータベースを使って検索した本は、取り扱い書店名、価格、保存状態などの情報とともにリストアップされ、その場で発注することができる。翌日には当該書店から shipping のオプションと料金、支払い方法等の説明が書かれたメールが届くので、購入の意志と要求された事柄を記入したリプライを送るだけだ。

Ⅳ サイバー・カンファレンス—— Mailing List

これまで紹介してきたもののほとんどが、ネット上のどこかにすでに蓄積されたリソースである。その総量は見当もつかないほど膨大なものであり、情報を欲するわれわれのアクセスを待ち、驚くべき効率のよさでそれに応えてくれる。しかし、それは受け手の反応に対して送り手がやはり敏感に反応し、迅速・柔軟に姿を変えていくような資源ではない。日々拡大する規模にもかかわらず、そういう意味では本質的には静的な資源とも言える。これに対し、送り手と受け手とがネットを介して動的に結びつく interactive かつ spontaneous な資源もインターネットは提供してくれる。このときインターネットは、リソース蓄積の器というより、人間と人間とのコミュニケーションを行なう場となるわけだ。インターネットが用意してくれる「電腦会議室」、それが電子メールによって情報交換とディスカッションを行なう Mailing List である。

Mailing List に参加すると、グループに属しているメンバーが発するメールが、すべて自動的に送られてくる。こちらが発したメールもメンバー全員に送り届けられる。発信された情報はその日のうちに全世界のメンバーによって共有され、翌日にはそれに対する誰かの反応がまた共有される。かくして地理的懸隔を超えた研究共同体が実現するわけだが、これはインターネットのみがもたらす画期的な恩恵だ。リストで交わされる情報のタイプは、質問、意見、問題提起、学会開催の告知、研究論文の募集などさまざまである。情報の質も、身を乗り出したくなる挑発や堂々と張られた論陣から、思わず苦笑がもれるナイーブな疑問や意見、誰も反応しない個人的つぶやきまで多様であり、まさに現実の会議そのものだ。

英米文学関連でどのような Mailing List が開設されているかを知るには、まず UPenn gopher の Literary Mailing Lists ([gopher://gopher.english.upenn.edu/11/Lists](http://gopher.english.upenn.edu/11/Lists)) を参照するのがいい。ここには時代別英文学、アメリカ文学、批評理論、文化研究などのジャンル別にディレクトリが設けられ、求める Mailing List を探すことができる。文学以外の諸分野に関しては、TILE NET/Lists (<http://www.tile.net/lists>)、Liszt: Searchable Directory of e-Mail Discussion Group (<http://www.liszt.com>) で探すのが便利だ。この2つは、ディレクトリのブラウズの他、キーワードによる Mailing List の検索もできる。

参加の手続きには、LISTSERV というメール自動配信プログラムへメールによるコマンドを送ることになっているが、この書式については上記のページなどに記されたガイドに従えばよい。² 参加したあとは、Read Only Member とならぬよう、できるだけ積極的に発言していくことが望ましい。例えば筆者の属しているアメリカ文学のリスト AMLIT-L では、先に述べたように、たとえどんなナイーブな疑問であっても温かく受け入れ、多くのメンバーが丁寧なアドバイスをしてくれるという雰囲気があるので、特に学生の積極的参加を促したい。レポートや卒・修論などで悩んだときには大きな助けとなってくれるはずだ。

おわりに

WWW の誕生以来、たった数年のうちにインターネットは爆発的に普及し、既存のさまざまなメディアに比肩しうる重要性を担うようになった。一説によると、わが国で500万を超える人々が何らかの形でインターネットを利用しているという。これは、ひとえに情報収集のツールとしてインターネットがおそろしく便利なものであることが広く認識されるようになったからだ。ところが、筆者の周りを見渡すと、この世の趨勢がいまだ浸透してきていないのではないかと思わざるを得ない。おそらく、文学研究というものが一種マイスター的技術を核とするところがあって、新しいテクノロジーに対し斜に構える傾向があることと無関係ではないだろう。しかし、これは大きな誤解であって、インターネットはそのマイスター的技術を大いに支援してくれるものなのだ。本稿は、文学のリサーチにおいてインターネットがいかに有用な、掛値なしに革命的と言ってよいツールとして利用できるかを具体的に紹介し、できるだけ多くの同僚と学生をネットへ誘うことを旨とした。インターネットはまだまだ大きな可能性を秘めた若いメディアである。多くの血ならぬ「知」の参加を必要としているのだ。

注

- 1 サーチエンジンの条件検索の基本となっているのは、Boolean Logic の集合理論の概念、すなわち AND (A AND B: A と B 両方を同時に含む)、OR (A OR B: A または B どちらかを含む)、NOT (A NOT B: A は含むが B は含まない) という集合の積・和・差の考え方で、これらの Boolean Operators を使った検索式によりデータを絞り込むようになっている。
- 2 Mailing List への参加の手続きについては、拙稿「英米文学研究のためのインターネット」(『英語青年』1997年1月号 pp.565-570) の中でその詳細を紹介したので、合わせて参考にしていただきたい。